
異世界から召喚されて

赤兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界から召喚されて

【Nコード】

N6576J

【作者名】

赤兎

【あらすじ】

死んだはずの主人公は異世界で新しい人生を送ることになる。

主人公は幸せな生活をてにできるのか！

そんなお話。

一、（前書き）

どうも、はじめまして赤鬼です。

あまり更新できませんがよろしくお願いします。

一、

俺は死んだ…。

なぜ死んだかと言うと、交通事故にあったからだ。

どうして死んだか分かるのかと言うと、自分の死体が目の前にあるからだ。

死因、内蔵破裂及び脳挫傷。

即死だった。

この世界に生まれてから17年、あつけない終わりだ。

…今さら自分にはなにもできない。

そんな時、目の前にブラックホールのような小さな穴が現れた。

どうせ死んでいるのだ、今さら怖いものなどなく、その穴に触れる。

「なっ！」

触れた先から消えていく。

吸い込まれるのかと思っていたので正直、驚いてしまう。

存在すら消えていくことに多少悲しみはあるが…もう諦めることにした。

そして…世界は暗闇に包まれた。

……何処だ、ここは……

寝た状態から起き上がる。

辺りを見渡すと魔方阵のちょうど中心に自分が寝ていたことに気が付いた。

そして…なにより、肉体がある。

魂だけとなってしまったはずが、またこうして肉体を持っている。

「どうなってんだよ」

独り言を呟くと誰かが息を呑むのを感じた。

「誰だ？」

その人物に向かって話しかける。

「あつ、申し訳ありません！私はヒナと言います！」

自己紹介して欲しかった訳ではないのだが、まあ、危ない人間ではなさそうなので安心した。

「それはいいが…ここはどこだ？」

とりあえず、自分の状況を知りたい。

「えつとですね、ここはカルラ帝国の魔術学校です」

なんて言った…今

「すまん、君はもしかして頭が痛い子なのか？」

「なんでそうなるんですか、私嘘なんて言っていないですよ」

つまり、ここは違う世界な訳で、俺はそこに來てしまったと。

「で、俺はどうやってここに來たんだ、それがいまいちよく分かるん」

だつてさ、俺消えたはずなんだもん。

「ああ、それはですね、私があなたを召喚したからです」

「あー、確かに、魔方陣あるし、そうなんだろうな」

まあ、復活できたし文句はないけどさ。

「はいっ！初めて召喚に成功しました！それに普通、人形の使い魔はあまり居ないらしいので凄く嬉しいです」

あー、俺使い魔になっちゃったのかよ、まるでゲームの世界だな。

「申し訳ないが俺は弱いぞ、魔法は知らんし」

「そんな訳ないじゃないですか、使い魔が魔法使えないなんて…
…ホントに使えないんですか？」

「ああ、そんなものは知らん」

ヒナはそれを聞いてガクリと頂垂れてしまったのだが…仕方ない
だろ、ホントに使えないのだから。

「せっかく成功したのに、魔法使えないのか、しかも弱いって
言ってるから弱いんだろな」

なんか、むかつくなこいつ。

まあ、言ってることはあってるし仕方ないか。

「なあ、契約は切れないのか？」

「無理です、契約は生涯で一回しかできませんのでその召喚した
ものと死ぬまで一緒です」

「そうか、何となくわかった、まあお互い諦めよう」

「そうですね…仕方ないですね」

涙を浮かべながら彼女は諦めたようだ。

「まあ、仲良くやろう」

「そうですね…よろしくお願いします」

そんな会話をしてとりあえず、名前を覚えておくことにした。

「俺は彼方 悠だ、悠と呼んでくれ」

「カナタ ユウさんですか、変わった名前ですね」

「確かに、変わった名前だと自分でも思っよ」

「それでは私の名前ですね。私はイーナ・ヒナ・シャイナと言います、ヒナと呼んで下さい」

名前の部分って真ん中なんだな、ま、異世界の常識なんだし仕方ないか。

「それでさ、ヒナ…話は変わるんだがここは学校なんだろう、俺はどうすればいいんだ？」

「ああ、それなんです…使い魔は腕輪を着けていれば学校にいていいんです」

腕輪か、首輪じゃなくてよかった。

「まあ、ならいいんだけど、とりあえず、この部屋から出た方がよくないか？」

あれから、召喚されたままずっと話していたのだが…はつきり言つて外がどんな世界か見てみたい。
その為に腕輪の話をきいたのだ。

「そうですね、いろいろ知っておくことも必要なことですし、出ましょう」

そして立ち上がりドアに近寄る。

「では、この腕輪を着けて下さい」

出ようとした時に腕輪を渡してきた。

凄く透明で、綺麗な虹色の光りを放っている。

「これさ、腕のサイズにあってないんだが？」

「ああ、それはですね、つける瞬間に勝手にサイズが変わる優れ

ものなんですよ、だから大丈夫ですよ」

まあ、ならいいか、つけよう。

カシ！

おう、確かに、サイズが変わった。

「なー、色まで変わったぞ」

「それなんですが…実はその色は実力によって変えてもらえるんですよ、学校で召喚したものは審査員に見てもらって、判定してもらうまでは白い色をしています。」

確かに、白い色だな。

「なあ、審査は今から受けるのか？」

「はい、でも正直、受けたくないですよ、だって私学校で落ちこぼれなんで、その使い魔も弱いとヤバイですよ」

「どうヤバイんだ？」

「魔術書の回覧ランクが最低になります」

つまり、高度な魔術は勉強出来ないことになるのか。

「でも正直、学校なら授業だけでもある程度やるんじゃないのか？」

「はい、普通は皆さんランクは気にしないんですが…私は名家の生まれで、その、ランクは重要なんです」

こいつはけっこう重荷背負ってるんだな。

「もしかして、召喚に望みをかけてたのか？」

「はい、召喚で強い者が呼べればランクがあがるんですが…失敗しました…」

最後の頼みの綱が…俺だったのか。

なんか、申し訳ないな。

「なあ、とりあえず、審査員のところに行った方がよくないか？」

「そうですね、現実を受け入れましょう…グス」

ああ、泣いてるよ。

本気で申し訳なくなってきた。

そして…こんどこそ部屋から出て歩きだした。

外に出ると、まるで王宮のような豪華な作りの廊下で、自分が場違いであることを指摘された気分になる。

それから暫く無言でついて行くと

「あら、落ちこぼれのイーナさんではありませんか」

目の前にツインテールるの女子生徒が出てきた。

「そうですね、落ちこぼれですよ、なにかご用ですか？」

「いいえ、べつに用事はないのですことよ、ただ、あなたが召喚でなにか出せたか見に来てただけですの」

うぜー女だなこいつ。

「この様子ではまた失敗したのですか？」

「いいえ、隣にいますよ」

キョトンとした目で俺を見る。

「彼ですの？」

「そうです」

そして…女はニヤリと笑って

「なら、私の召喚獣と戦かせてみませんか」と

「いや、それは…」

「わかった、戦ってやる」

腹がたったのでつい言ってしましまして、ヒナが青ざめて

「死んじゃいます！やめて下さい」

と言ってくるが、バカにされたのだ、なら、戦ってブチ殺してやる。

「ヒナ、死んだら他の召喚できるんじゃないか？」

「できます、でも…」

「気にするな、所詮、俺は一回死んでる」

「え」

呆然とするヒナをおいて、ツインテールに着いていく。

そして…現在、広場

向こうの召喚獣はユニコーンだ。

かなりのランクらしい。

だけど、関係ない。

「さあ、初めてちょうだい」

俺は覚悟を決めた。

なにがあるうと勝って見せると！

一、（後書き）

感想などありましたらよろしく願います。

二、（前書き）

どうも、赤兎です。

皆さん呼んでくれて有難うございます。

こんなに読んでくれる人がいたことに驚いている自分があります。

どうぞ、これからよろしく！

二、

さあ、どうする！

キレて戦うことになったが…正直、死亡フラグ全開だ。

そう言えば、昔、爺さんが教えてくれた武術がつかえるが…効くのだろうか？

爺さんが言うには人に当てたらいけないと言われてたし練習だけで実戦経験がない。

だが…ここはそれに頼るしかない。

その時ユニコーンが動いた。

「使うしかないよな」

そして…ユニコーンの方へ意識を集中する。

角の辺りからなにか強い力の反応を感じた。

恐らく、角からなにか出すきだ。

だが、攻撃がくるのがわかれば、後は避けてこちらの攻撃を打ち込むだけだ。

なら、接近あるのみ！

「あら、あの落ちこぼれ召喚獣突っ込んで来ましたのね…ばかなのかしら？」

「駄目！悠、死んじゃうよ！」

まだ、判らんだろ！

勝手に人殺すなよ…まあ、皆さん俺がただ突っ込んで行ってる様にしか見えないからしょうがないか。

そんなことを考えていると攻撃が迫ってきた。

「第一歩の型、流世」

身体を一瞬で軌道から反らす。

皆なにが起きたのか分からない様でそのすきに、ユニコーンの前にたどり着く。

「第二步の型、暁」

ケリをユニコーンの顔面に叩き込む。

ドゴー！

鈍い音をたて、ユニコーンは吹き飛ぶ。

「なっ！」

「えっ！」

ヒナとツインテールが驚いているが…自分が一番驚いている。

なんせ、当てたことがなかったのどこまで威力があるとは知らなかった。

「爺さん、助かったよ」

この時ほど爺さんに感謝したことはなかった。

「
が
ああああ
」

それもつかの間のことだった様でユニコーンは起き上がって来た。

「暴走してる、悠！逃げよ」

「ああ、わかった」

そして…走りだそうとして気が付いた。

ツインテールの方にユニコーンが突進して行くことに。

「あ、いや、止まって……いやああああ！」

くそ、間に合わない。

どうする、なにかないのか？

ドク！

なんだ、体が熱い！？

「くそ、なんだよ、うぐ、がああああ！」

……覚醒の時はきた……我が後継者よ……力をくれてやる……

頭のなかに声が聞こえてきた。

……私は……神……そして……もはや存在せぬ神……だが……
波長が合う……者が……現れたならば……我が力は……受け継がれる……

なに言っでやがるんだ。

……これは……残留思念……私からの……願いとともに……力を
たくす最後の……使命

使命？

……世界を……救え……奴を止め……るのだ

そこまで言われ俺は現実にもどる。

奴って誰だ？

とりあえず、今はユニコーンを止めないとマズイ！

「第九の型、片吹！」

なぜかユニコーンの前にたどり着く。

おかしい、こんなに速く移動出来るなんて！

そして…ユニコーンの腹部にとてつもなく速い拳を叩き込む。

今度は吹き飛ばすのではなく、だが、拳はめり込んでいく。

この技は殺人専用の技で内臓自体を攻撃出来ると爺さんは言っていた。

「くたばれ！」

「ッッ!？」

ユニコーンは声すら出さず、倒れた。

恐らく、死んだだろう。

「悠、あなた強いじゃない！」

「いや、たまたまだ」

「まあいいよ、とりあえず、あの人のことどうにかしなさいよ」
ツインテールの方を指差し言ってくる。

「はいはい、わかったよヒナ」

正直、面倒だけどね。

「これでアイツのことはバカにしないで貰えるかな？」

「ええ、こんなものを見せられたんですのよ……そんなことをすれば、私が危ないことなど見たらわかります」

ああ、泣いてるよ。

この世界の女性によく泣くな。

「それで貴方の名前を聞いてもよろしいかしら？」

「……彼方 悠だ」

「そうですか……私はクラーク・ラル・シークと言います、よろしく悠さん」

「よろしく」

その時、なぜか俺は意識を失った。

二、（後書き）

がんばりますよ。

三、（前書き）

眠いよ。

三、

暗く、広い世界。

自分が生きている感じがしない。

自分はどうなってしまったのだろうか？

「……なんなんだ、ここは………」

「ここは神の住む場所だよ」

「ッ!？」

後ろを振り向くと、そこに銀髪青年が立っていた。

「どういう意味だ」

「あれれ？あのお方の残留思念から教えてもらってるでしょ、お前は選ばれたって？」

心底不思議そうに言ってくる。

「説明するとね、前の神は星を救う為に星と同化して消えたんだよ、でもさ、ホントはそんなことはしてはいけないんだよ、だって神の席を空けることになるし、世界の均衡が崩れてしまう。だから…自分の席に誰かを座らせることにしたんだよ」

つまり、後釜ってことか。

「で、俺は神になってここに居ないといけないのか？」

すると首を振る。

「いや、ただ普通に生活すればいいだけでここに来る必要なんてないんだよ、だって人の寿命は短いから無理だしね、神のまねなんて」

「だが…居ないとマズイんだろ？」

正直、内容が噛み合っていない気がする。

「あー、ごめん、僕は説明がへただから、分かりにくいと思うけどさ、簡単に言うとな神がいることにするだけで、実際は神の力の一部を人に植え付けてダミーを作りだしただけなんだよ。これで力のバランスがとれるしね」

「だいたいわかったよ、だが…寿命とかどうなるんだ？」

不死身だったら凄く嬉しい。

「いや、普通だし、それに死んだら次の奴を探すことになってる」

うわぁ、こいつら適当だな。

「一つ聞きたいんだが、あの残留思念が言ってた《奴》って誰だ？」

「ああ、あれはもう終わったから気にしないでいいよ、だってもう死んでるから」

はつきり言って拍子抜けした。

今から敵と戦っていく展開だと思ってたから、なんか虚しい。

「だからさ、平和な人生を送って下さいな。それではさようなら」
」

「……さん」

「……ゆ……さ……」

「起きてください、こんなところで寝ないでください!」

「……」

目を開ける。

ん？なんかヒナが手を振り上げてる？

あれ、ものすごい速さで降ってくる。

バシッツイ！

「いっつつつ！」

声がでないほど痛い！

顔が変形したんじゃないかこれ？

「もう少し優しく起こせ！それと、起きた瞬間叩くな！」

涙目で訴える。

「私は叩いてないですよ」

顔をそらしながら言う。

「ほう、なら証人がいるがどうするかね？」

ツインテールが居たので言ってみる。

「ええ、この目でしっかり見てましたことよ」

「うっ！ごめんなさい」

逃げ場がないことに気が付き謝ってくる。

「許しす……と思ってるのかー!!」

「ヒイい!?!」

「はあ、嘘だよ」

縮こまって頭を手で押さえているヒナに言ってる。

「虐める反対……」

「何か?」

「いえ!何でもございません!」

分かりやすいなこいつ。

「てっ!こんなことしてる暇ないですよ!審査受けないと!」

「行つてら!張本人が行かないでどうするんですか!」「ごめんなさい」

ツインテールを放置して俺達は審査員のところに行く事になった。

だが…大丈夫なんだろうか?

いちおう、神さまの力を内包してるんだが……まあ、いいか。

三、（後書き）

寝るよ。

ラルの視点（前書き）

あー、なんか更新してしまった。

勢い任せでやっちゃった！

どうしよう……

ラルの視点

ラル視点よりお送りいたします

私は何を見ていたのだろうか？

あんな動きは見たことがない。

ユニコーンはランクで言えば、上位の雷を司る最強種だ。

その雷を軽くよけ、一瞬で攻撃をした。

何も見えなかった。

あれは何なのだろうか？

そんなことを考えていると、ユニコーンとの繋がりが切れかかっていることに気が付いた。

「がああああ」

だが…遅かった。

気が付くのが遅かった。

必死に叫んで止めようとした。

止まらない。

もう駄目だ。

私は死ぬ。

死にたくないよ！

その時彼が、目の前でユニコーンを殴っていた。

瞬きの間のほんの僅かな時間だった。

「カッコイイ…ですわ」

誰にも聞かれないほど小さな声で呟く。

そこで、彼が近づいてくる。

「これでアイツのことはバカにしないで貰えるかな？」

「ええ、こんなものを見せられたんですのよ……そんなことをすれば、私が危ないことなど見たらわかります」

バカにするどころか、彼に惚れそうだった。

「それで貴方の名前を聞いてもよろしいかしら？」

「……彼方 悠だ」

「そうですか…私はクラーク・ラル・シークと言います、よろし

く悠さん」

彼は微笑み

「よろしく」

と、一言喋り、倒れた。

で、倒れましたわ！

「大丈夫ですよ！」

「くー、すー」

寝てますわね。

完全に寝てますわね。

「しょうがないですわね、寝かせて「なにねてるんですか！悠さん！起きてください！死んじゃ駄目です」……死んでないですわよ？」

「え、あつ、ホントですわね。まあ、とりあえず、起こさないと！」

その後、暫くはこんな感じが続き、私の出番はなくなっていましたの。

ラルの視点（後書き）

本編はまたのお楽しみに！

四、（前書き）

短い

四、

審査員室に着き、ドアを開ける。

そこには爺さんに婆さんが待っていた。

一言で言つと花がない！

やる気が無くなりそうな感じた。

「いつまで待たせるのかね、まったく、もう少しで帰るところだ
ったぞ」

一番偉そうな爺さんが呆れた感じで話す。

「すみません、少々問題が発生して……」

「まあよい、それで、その者が召喚された者か？」

「はい、そうです」

ヒナ緊張してるな。

ま、どうでもいいけど。

「はあゝあ
」

眠いよまったく。

「ちょっと、悠さん！もう少し場をわきまえて下さい。私の評価が更に下がるじゃないですか！」

小声で叱られた。

「すみません、でも、眠いよ…ZZZZZ…」

「それは眠いんじゃないくて寝てますよ！起きてください！」

「はっ！死んだ婆ちゃんが！」

「変な川なんか渡っちゃ駄目ですよ！寝ぼけてないでちゃんとして下さい！」

「あれ？婆ちゃん若くなつた？」

「私は悠さんのお婆様じゃないですよ！」

「母さん？」

「それも違います！」

あれ？違うなら誰？

あー、ヒナか。

そうだ、今、審査員の前にいるんだった。

「話はすんだかね、ん？」

「すみませんでした」

ヒナが謝る。

「早くしてくれ、眠いんだ」

俺は思っていることをそのまま喋り、ヒナに睨まれた。

「悠さん、ちゃんとしてください」

恐いよヒナさん！顔が般若だよ！

「あつ、ああ、その、すまん」

騒ぎは収まり、てか、切れてた爺さん達もヒナの顔が恐かったのか

「さ、さあ、始めようかの！」

と必死に言っている。

てか、どんな審査をするのだろうか？

四、（後書き）

次の更新は日曜日です。

五、（前書き）

うーん、話がぐちゃぐちゃだ。

それに、一日早い更新になってしまった。

五、

審査はまず、魔力審査だそうだ。

「あの、その禍々しい機械で計るんですか？」

なんか電気椅子の様な機械の椅子が運び込まれてきた。

「そうだ、まあ座りたまえ」

「……」

しょうがないので椅子に座り、身構える。

「では、電流を流したまえ」

やっぱり電気椅子なのか！

バリバリ！

「うっ！」

ヤバイ！殺される！

「止めよ」

電流が止められ、何とか助かった。

はつきり言って、こんなやり方で本当に魔力測定できるのだろうか？

「うむ、出てきたぞ」

出たらしい。

てか、こんなやり方は間違っていないか？

もっと違うやり方探せよ！

くそ、でも結果が気になるから全否定はできない！

「どうなんですか？やっぱり魔力無いんですよ」

ヒナが早く聞きたいらしく、爺さんを急かす。

「いや、魔力は……あるのだが」

「やはり少ないんですよ」

はあ、とため息をヒナがつく。

「早とちりするでない、はつきり言って、魔力が大き過ぎるのじやよ。こんな奴を見たのは始めてじゃ」

ヒナはそれを聞いてポカーンとしている。

「まず、魔力はな、生命力が源と言われておって、その生命力以上の魔力は普通ないのじゃ」

「それで爺さん、俺の魔力はどうなってるんだ？」

この爺さん、俺がまるでゴキブリ並の生命力だって言いたいのか？

余計気になるからそんな言い方やめて欲しい。

「はつきり言って、召喚された今までの者達はこの理の範疇であつたのだ。だが…お主の魔力は…既に生物の範疇を通り越しておる。強いて言うなれば神…じゃな。それ以外では説明がつかん」

あー、あの残留思念のせえか！

あのやろつ、なんてことしやがる！

「それでの、まだ終わりではないのじゃ」

まだあるのか？

「生命力は見る事ができるのじゃ。そういった魔法があつて、今さつき使っておつての、お主を見たのじゃがゼロなのじゃ」

もしかして、事故で死んだせいかな？

「つまり、お主は魔力の固まりだ」

てことは、魔力使えば死ぬのか？

「お主、なに者のじゃ？」

あー、説明しなくっちゃなんのか。

説明中

「信じられん、では一度死んでしまい、この世界に来たのじゃない？」

「ああ、そうなる」

あえて、神のことは伏せた。

言ってしまうとなにされるか分からん。

「ふむ、ただの人から召喚獣になったのか、まあ、人間は召喚されたことはないからの、魂だけになったことで人間として、認識されなかったのじゃろっ」

とりあえず、俺のことは人間として見てくれないのだろう。

「で、俺は召喚者といていいのか？危険だから殺すって言っんじやないよな？」

老人たちはポカーンとして、

「ハハハ、そんなことはせんよ。暴走するか、もしくは悪意があると判断した場合は殺すことになるかの」

まあ、今のところ、大丈夫らしい。

「でさ、次は何すんだ」

「ああ、戦闘能力をはかる審査じゃ」

と言って、別の部屋に移動した。

それは、部屋と言うより、闘技場だった。

「まず、我々が用意した召喚獣と戦ってもらっのじゃがよいかな？」

「ああ、構わない」

こんなやりとりをしている中、ヒナはまだ、ポカーンとして、現実逃避していた。

「うむ、ではグリムと戦ってもらっかの」

「グリム？」

「下級の悪魔だよ。だが、油断していると、つけこまれるぞ。強い召喚獣は大概油断して負けておるからの」

ハハハ、そんなこと教えていいのかよ。

「わかった」

では、始めよう。

弱き者のが、強き者のを倒す技で。

「さあ、中心にある闘技台の上で待っておれ、すぐに連れてくるからの」

とりあえず、闘技台の上で待つことにした。

どんな奴なんだろうか？

グリムなんて聞いたら、何だか化け物な感じがするな。

実際、まだ見てないから何も言えないが…

「きゅーう」

何か台に上がってきた。

犬？

じゃないな、よく分からんが……可愛いな。

「では、始めてもらおうかの」

犬？対人間モドキの試合が…今始まった。

「まあ、早く終わらすか」

構えをとり、犬？を見据える。

「第七歩の型、秋雨」

歩きながら近寄る姿は隙だらけに見えるこの技だが…これはそんななま優しいものではない。

相手の動き次第で、様々な攻撃ができる。

ただし、自分から仕掛ける技でないため、攻撃されなければなら
ない。

だから隙だらけにしているようにしている。

「ガバッ！」

可愛い犬？は口を大きく開く。

ただ、開く幅が大き過ぎるのだ。

はつきり言って、軽く人間など飲み込むだろう。

だが…これでアイツは罠に掛かった。

さあ、どう来るかな。

見ていると、正面からただ突っ込んでくる。

「ギチギチギチギチギチギチギチギチギチギチギチギチギチ」

口のなかには牙の様なものが奥のほうまでびっしりあり、全てがぐにゃぐにゃ動いている。

あまり、気持ちのいい見た目ではない。

目の前まで来たので流れるように攻撃を受け流しながら心臓のあるであろう場所に拳を叩き込む。

だが、まだ終わりではない。

この技は、次に脳を破壊する。

その方法は今、叩き込んだ拳をそのまま頭の方へ振り抜くという簡単だが難しことによって起こる。

心臓を圧迫し、それにより脳の血管を切るのがこの技だ。

つまり、その為に拳を頭の方へ振り抜き、心臓を圧迫され血液の逃げ場がない状態なので血管が切れる。

「グキユ！」

グリムの目玉が飛び出る寸前までに見開かれる。

「決まっ たな」

グリムは立つたまま死んでいた。

「爺さん、この技は何処で考えたんだよ」

自分の爺さんが少しずつ、怖くなってきた。

五、（後書き）

明日更新しようか考え中。

六、始まり（前書き）

更新遅れました、すみません。

六、始まり

この審査を見ていたものは今までにない恐怖を感じた。

グリムは普通の召喚獣審査では使用されない。

より、強い召喚獣がでた時だけ使用され、そのへんにいる召喚獣では間違はなく一瞬の内に喰われてしまう。

だが…この少年はなんなのだろうか？

喰われるどころか、瞬きの間のほんの一瞬の間、その時にはもう、グリムは死んでいた。

あのお嬢さんはとんでもないものを召喚してしまったのではないだろうか。

この先、彼が敵とならないことを願おう。

審査員 議長 アーク・アド・ラレンツァ より

宛先

クリマ・ナイア・メセッド学園長殿へ

あれから、ヒナはなかなか現実逃避をやめない。

心、ここに有らず。

こんな感じだ。

「なあ、ヒナ、もう夜だよ。審査が終わってからぼーっと立ったままじゃん。お腹すいたよ？眠いよ？風呂入りたいよ？」

そこでやっとヒナがこちらに向く。

まるで、ブリキの人形の様に、ギギギギ、と音が聞こえそうな首の動かしがただ。

「ひっ！」

思わず悲鳴をあげそうになる。

ホラーだ。

ホラーだよ。

リグのテレビから出てくるお姉さんみたいだ！

現実でやるなよ、相手が知らない人なら、気を失うよ？

「……弱いと言ってたじゃないですか？……」

息を呑む。

目が、カッと開いてギョロリと見てくる。

もつやめて！怖いよ！

「え、あ、えつつ、その、ですね、弱いと言っていたのは……すまん、でも、この世界に通用するはずないと思って……ですね、だから……」

「怒ってるんじゃないですよ。ただ、嬉し過ぎてこれが現実なのか分からなくなってきたんです。本当、びっくりしてます、そして……有難うございます。私の召喚獣さん！」

ああ、なるほど。

嬉しいのだが……どうすればいいんかわからなかったのか。

しかも、弱いと言っていたのに余裕だったし、そりゃ驚くよね。

「これからもしろしくお願いしますね！悠さん！」

「ああ、よろしく、俺のご主人様」

何か、やばい世界の人の発言に聞こえそうな感じが…この場はそんなふうには聞こえないだろう。

こうして、俺とヒナは出会った。

六、始まり（後書き）

次から本編です。

七、飯、食えず（前書き）

ああ、妄想の産物。

七、飯、食えず

世界は非常だ。

戦争、飢餓、暴力と言う、人間の悪意の産物。

世界は……神は……人など、どうでもいいのだろう。

戦争により、親を無くし、嘆く者のを助けただろうか？

戦争により、子を無くし、嘆く者のを助けただろうか？

答えは……否

なぜ、人を救うことをしないのか？

答えは……人は自分で助からなければ意味がないからだ。

英雄 ガラム・アト・ルシア

カルラ帝国 第一図書館より選抜

英雄の書より

「すみません、なんで俺、捕まってるんですか？」

そう、今、彼は帝国の兵に捕まっている。

「すみません、教えてもらっていいですか？」

王宮の廊下を歩きながら、兵は無言で悠を連れて行く。

ふと、兵が立ち止まり、大きな門をノックする。

「入ってよいぞ」

「ハッ！」

その声に反応して、兵が訓練されているのか、いい返事をする。

「すまん、後は中のお方に話を聞いてくれ。私達もいろいろ教えてもらってないのだ」

ああ、そんな申し訳なさそうにされると、困るんだが。

「わかりました、お疲れさまです」

では、と言って去って行く。

そして…扉を開けながら今日の朝のことを思い出す。

朝

昨日、この世界に喚ばれ、いろいろあった後、俺はヒナの家に行った。

そして…疲れていたので用意された布団ですぐに寝てしまい、あまり家のことを見なかった。

そして…驚愕した。

なんだ、この豪華な家は！

天井にはシャンデリア、寝ている布団はキングサイズより大きなもの、だ。

「に、逃げたい」

「それは駄目ですよ？」

ヒナの声がしたのでそちらを向く。

扉のところにちょこんと、ヒナがいる。

「ここは…本当にヒナの家なのか？」

俺は思わず聞いてしまう。

「そうです、昨日見てな…あー、そうですね、昨日は勝手にこの部屋に入って寝しまいましたから、よほど眠かったんですね」

うん、会って2日目なのに、俺のことよくわかってるね。

「まあ、あれだけ眠いって言うてましたししょうがないと思って諦めましたよ、昨日は」

「すまん、眠くて周りが見えてなかった」

はあ、とため息をつかれてしまった。

だが、しょうがないではないか、召喚されて、更には戦って、疲れていない方がおかしい。

「そうですね、まあ、しょうがなかった、と言う事にしましょう」

諦めてくれたらしい。

「とりあえず、朝食にしましょう」

うん、それがいい、昨日、なにも食べてないし。

「頼むよ」

そう言ってベッドから出ようとした時だ。

「ガシャガシャガシャ！」

なんの音か分からないが、自分達の方に近寄ってくる。

そして…その正体は目の前にやって来た。

「召喚獣、貴様を我が城に連行する。これは、姫殿下の命令である」

と、これが朝のことだ。

てか、なんで俺、いきなり存在知られてんだ！？

おかしい、なぜ！？

「おい、お前、なぜ扉のところに突っ立ておる。早くこちらに来んか」

これが姫さん？

確かに、可愛いよ？

でもね、言葉遣いあまり良くないよ？

15歳くらいに見える。

きつと、わがままなんだろうな、あの言葉遣いだし。

「あの、なぜ俺は姫さんに呼ばれたんでしょうか？」

一番の疑問点を聞いてみる。

「ああ、それはの、昨日の審査員が校長に手紙を出したらしのじや。まあ、その時たまたま校長室内に我もいてな、手紙を一緒見て、面白そうだから連れて来させたのだ」

そして…ニヤリと笑う姫さんは怖かった。

七、飯、食えず（後書き）

次はいつ更新するか分からないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6576j/>

異世界から召喚されて

2010年10月10日05時10分発行